3．名古屋大学教育学部附属高等学校『国語表現』

米山　誠　酒井　為久　斉藤　真子　高木　徹　長谷川　弘

目次

書くこと……2
第一章　書くことについて……2
第二章　日　記……7
第三章　要約と感想……8
第四章　手　紙……11
第五章　小論文……15

話すこと……18
第一章　話すことについて……18
第二章　スピーチ……19
第三章　面　接……30

資料集……32

原稿用紙……57

資料集

書くこと……32
森本哲郎　プロローグ――「私」のいる文章と、いない文章……32
外山滋比古　テーマと展開……33
大類雅敏　テンで損した話……34
井上ひさし　句点と読点……35
岡崎洋三　日本語は七通りの虹の色……37
木下是雄　日本語とテンの打ち方……39
木下是雄　私の考える〈名文〉……41
理科系の作文技術……

日記……43
永井荷風　『断腸亭日乗』……43
寿岳章子　『過ぎたれど去らぬ日々』……44
深代惇郎　『青春日記』……44

手紙……45
向田邦子　無口な手紙……45
夏目漱石の手紙……45
芥川龍之介の手紙……46
戦没学生の手紙……46

小論文……48
杉原泰雄　明るい未来を求めて……48
朝日新聞　心の国際化とナショナリズム……48
隅谷三喜男　経済成長の行き着いた先……49
平山知佐子　学歴社会の中で思うこと……50

聞き書き……51
渡　知子　飛騨・春慶塗について……51

話すこと……52
外山滋比古　わたしのパブリック・スピーキング……52
島森路子　聞くことに始まる……52
岡部朗一　アメリカと日本……53
スピーチ―自分の考えをはなすために―……53

電話……54
川崎　洋　電話でしゃべるとき……54

書くこと

第一章　書くことについて

1　文章表現上の注意点

しばしば「文は人なり」と言われるように、文章表現には、たとえその文章が極めて短いものであっても、書き手の性格、ものの考え方・とらえ方、素養などが、ほとんど全部うつし出される。それゆえ、よい文章表現の条件は、単にことばの技術の問題ではないと言えようし、また、よい文章の条件には一定のものがなく、多様にして無限であるとも言えよう。つまりは、ひとりひとりが自分の思念をどう表現するかというくふうを凝らすところに、文章表現への道がひらけてくるということである。

しかし、そのような文章以前の諸問題はさておき、ここでは、ごく卑近な「文章表現上の注意点」CHECKLIST FOR REVISION をあげてみよう。言い換えれば、われわれが反省的に自分の文章を検討する場合、どのような点に目をつければよいかを概観しようとするのである。

(1)文章の構成について

イ　主題のとらえ方は適切か。

ロ　構想のたて方、文章の構成、展開のしかたは適切か。

ハ　素材・資料はうまく整理されているか。

ニ　段落のたて方は適切か。

題目を与えられた場合であろうと、みずからある題目を取り上げた場合であろうと、文章は、何を、どんな目的で、どんな長さで書くかが決まっている。どんな目的で何を書くかをはっきりと見定めることが、第一に大切であろう。それが、おぼろげながらも、定まってくると、われわれは、書くべきこと、書きたいことを思いうかべる。それらは、はじめ雑多でとりとめもないが、目的に従って次第に整理されなくてはならない。そして、ぜひ必要な材料が残り、余分なものは捨てられる。このような操作は、紙の上にメモを作ってみて秩序だてていく場合もあるし、頭の中で考えている場合もあるが、そういうアウトラインを作ることは大切であるし、誰でも、なんらかの方法で実行していることである。

文章表現は、文字で書き、目で読まれるものであるけれど、表現の形式としては、音楽や映画に似ていて――絵画や彫刻などの美術が、はじめから全体の姿を現わすのとは違って――はじめがあり終りがある。冒頭から始まり、次から次へと展開されて、終末に至って、表現は完結するのである。一編の文章は、多くの場合、幾つかの段落があって、書くべきこと、書きたいことが一つ一つ段落においてまとめられ、それがつぎつぎと展開されて、完結する。はじめに何を述べ、次に何を述べ、終りをどう結ぶか、これが構想であり、文章の構成である。

このような構成を考えていくと、はじめに思いついた素材が整理され、役立つものだけが残り、いらないものは捨てられてしまうのである。あるいは、はじめ用意しなかった事がらが加えられることもある。これも、素材・資料の整備の一種である。

(2)表現について

イ　文と文との結びつきは正確か。

ロ　語法上の誤りはないか。

ハ　文脈の乱れはないか。呼応は正しく保たれているか。

ニ　文体の混交はないか。

ホ　用語が適切・的確であるか。

文章の目的は、なんといっても読み手に理解してもらうことが第一である。そのためには、まず正確であること、できる限り明晰であること、読み手に余計な精力の消費をかけないことが大切である。

普通、一つの段落は幾つかの文から成る。その文と文とは、いろいろな形で結びついているが、「これ」「それ」「この」「その」のような指示する語や、「だから」「そうして」「しかし」のような接続の語には、特に注意して、正確で明晰な表現をと心がける必要がある。指示語や接続語を用いない場合にも、文と文とはなんらかの関係を保っていなくてはならない。文と文との結びつきにおいて正確で明晰であるか、また、文中で正しい論理・文法が守られているかなどは、文章表現上の最低の要求である。何を指しているのかわからない「これ」「それ」や、誤った接続語の用い方や、社会的習慣からはずれた語法は、読み手を疲れさせるばかりである。

現代文で文法上の誤りをおかすことはめったにあるまいが、たとえば、ついうっかり、中立を保て得るだろうか。

と書いてしまったり、

友だちから本を借っていたので、

というように、地の文に方言を用いてしまったり――会話をうつす場合に、方言をそのまま示すことは、効果的であるけれども――することは、警戒しなくてはならない。母国語にあって、諒解不可能なまでに文法上の誤りをおかすことは例外的であるけれど、時には不用意な表現をすることはある。これらは、読み手に違和感を与えるという点で、注意しなくてはならない。

文脈という語は、より広義に用いられることはあるが、ここでは、たとえば、

わたしたちは、友人との会話の中で、将来どんな職業につきたいと思っているかという話が出ることがある。

というように、主述の関係や、呼応の関係を、ついうっかり無視した場合、これを「文脈の乱れ」と呼び、このような一文中の語法の関係を指すことにしておく。この文は、「わたしたちは」と書き起こしたら、「話が出る」ではなくて「話をする」とならなくてはおかしいし、あるいは、「話が出る」というのなら、「わたしたち」は不要の語句である。文章は、語句をつぎつぎと述べていくので、前に書いたことばを忘れて、文脈のよじれを起こすことがある。話しことばでは、あまり目立たないことも、書きことばでは、読み手に大きな負担をかけることになり、時には誤解を招く。

文体という語は多義に用いられるが、ここで言う文体とは、極めて単純な、口語文における「だ・である」体と、「です・ます・であります」体との区別である。どんな文体を用いるかは、目的や相手によって自由であるし、時には「だ・である」体と「です・ます・であります」体をまぜることもあるが、普通の文章では、どちらかに統一するのがよい。不用意に自分の気分のままに混用することは、読み手に違和感を与える。音楽に長調・短調の別があるように、一編の文章では、原則として一つの調子を保つことが、一つの格調を保つことになり、効果的なのである。

用語の適切・的確とは、ある表現をしようとする場合に、最もよく意味を示すことば、最もその場に適した言いまわしは一つしかないはずだという原理に基づいている。日本語の語彙は複雑であるけれども、その中でその場に最も適したことば、あるいは言いまわしをさがす心がけは、文章表現の初歩的な条件であろう。これは熟語や成語（「道草を食う」のような固定的表現）、あるいは比喩（「雪のように白い」「わたしは井の中の蛙だった」の類）にも及ぶ。「推敲」の故事も、つまりは、そのような苦心を示しているのである。

(3) 表記について

イ　用紙の用い方、記載法に難点はないか。

ロ　段落を示す刻み込み indention は適切か。

ハ　句読点や記号は、的確に用いられ、適切に示されているか。

ニ　漢字の誤り（誤字・誤用）はないか。

ホ　かなづかいの誤り（誤用・混同）はないか。

ヘ　送りがなは適切か。

ト　漢字、ひらがな、カタカナ、その他の文字は適切に使い分けられているか。

チ　誤読されるような字体はないか。

リ　脱字や、余分な字はないか。

書きことばは、しばしば指摘されるように、音声や表情や場面の助けをかりることなく、文字や記号だけで表現するのである。話しことばの場合よりも、慎重で厳密な表現が要求される。

一編の文章は、ふつう原稿用紙を用いて書く。その際、題名や筆者名をはっきりと示し、完成したら、用紙の順序を整えてとじ合わせて示す心がけも必要であろう。

段落のはじまりは行を改めて、一字分下げて書きはじめる。段落と段落の間の休止を示すためである。よいまとまりをもった段落がきちんと示され、文章の展開が読み手にすなおに伝えられることは、大切な要件である。

文の切れ続きを示す句読点、引用その他を示す記号は、話しことばの場合の息つぎや、話の調子にあたるものを視覚の上であらわそうとするもので、文章表現にとって、存外大きなはたらきをしているものである。

。（句点、まる）　、（読点、てん）　・（中点、中ぐろ）　「　」（かぎかっこ）

（　）（まるかっこ）　――（ダッシュ）　……（リーダー）

のような区切り符号や、

人々　つゞき　いろ〳〵

のようなくりかえし符号の正しい用法、つまり今日の慣用については、よく調べておきたい。（くりかえし符号のうち、「々」は今日でも用いられるが、「ゝ」と「〳〵」は横書きでは用いず、また活字化が予想される場合には避ける方がよい）。中でも、読点の用い方は、国文表記のいろいろの事情から、なかなか一定の基準を見出せないのが実情であるが、それだけに十分に留意したいものである。よく引き合いに出される。

刑事は、血まみれになって逃げる男を追いかけた。

刑事は血まみれになって、逃げる男を追いかけた。

という二つの文は、読点の打ち方によって文の明晰さを示すことのできる例である。句読点や記号も、文章表現において等閑視できない大切な要素である。

漢字の誤り、かなづかい・送りがなの誤りなどは、話しことばにおける間違った発音や聞きとりにくい表出にあたるであろう。対話の場合と違って、文章では、読み手はききかえすことができないのである。正しい用字法は、文章表現の基礎的条件である。語彙との対応によって漢字・ひらがな・カタカナは適用されなくてはならない。そして、巧拙はと

もかくも、誰にでも読んでもらえる、よい書体を身につけておきたいものである。

漢字については、少なくとも「常用漢字」の正しい字体、音訓両様の用い方に通じていなくてはならない。字体はもちろんのこと、漢字には形と音と意味とがあるのであって、字体・音価は正しくても、

新しい年を向かえた。

Aさんに招介された。

わたしは無感心だった。

というような誤用は許されない。

かなづかいについては、いわゆる「現代かなづかい」と混用してはならない。送りがなのつけ方である。文語文に用いられる「歴史的かなづかい」のきまりを会得しているべきであるについては、読み手に余計な負担をかけないという立場から、今日の標準的なしきたりをわきまえておきたいものである。

2　段落のつけ方

段落は、基本的には

ア　筆者の立場、観点などが変わるとき

イ　取り上げる対象が大きく変わるとき

ウ　場面、時間的関係などが変わるとき

に改行することによって示される。実際には、これにいろいろな条件が加わってくるが、確かに、右の三つの場合を指摘できるであろう。そうして、これらの段落は、

ア　主題あるいは中心となる思想や主張を述べる段落

イ　発端を示したり、新たに問題を提起したりする段落

ウ　前段から発展する事がらを述べたり、発展する考えを述べたりする段落

エ　前段を詳しく説明したり、同種のことを立場を変えて言ったりする段落

オ　対立する事がらや考えを述べる段落

カ　つなぎの段落

キ　前おきや、つけ加えの段落

のような関係で結びついて、一編の文章をなすのである。

※段落については、木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書）の「4　パラグラフ」を参照してほしい。

3　文体の選択

文体選択の問題というのは、今日の日本語文体の二基調である「だ・である」体と「です・ます」体のいずれを採るかという意味で、これは、今日全く規範はないようにみえるが、それでも新聞の報道記事に「です・ます」体はふつう用いられず、書簡文に「だ・である」体はふつう用いられないというような傾向はある。答案・レポート・論文の「だ・である」体も普遍的であると言えよう。これらのわきまえの上にたって文体を選択し、いずれかを基調と決めたら、特殊な効果をねらう場合はともかく、一般的には恣意的な混用は避け、基調を保って、文章の統一性を失わないようにする方がよい。

4　句読点・諸記号

今日、国文で用いられる「くぎり符号」には、次のようなものがある。

1　。（句点、まる、はしまる）……「文」の切れめに用いる。横書きにも用いるが、この場合には、．（ピリオド、フル・ストップ）を用いることもある。

2　、（読点、てん、チョン）……文の中で語句の切れ続きを明らかにする場合に用いる。横書きの場合には、，（コンマ）を用いるのが普通である。

3　・（中点、中ぐろ、中ポツ）……同類の事物の名称を列挙する場合に用いる。

埼玉・栃木・茨城三県にわたって……

このほか、外国語・外来語のくぎり、略称・略記号のくぎり等に用いる。

ヒット・エンド・ラン

昭和三七・二・一九

横書きの場合には、昭37.2.19のようにポイントを用いる。

4　「　」（かぎかっこ、ひっかけ、単鉤）……引用文、引用語句を示したり、会話であることを示すのに用いる。また、その語句を文中で特定の意味に用いている場合や、特にきわだたせる場合などに用いる。

5　『　』（ふたえかぎ、双鉤）……引用文中にさらに引用文が含まれている場合や、書名などの引用に用いる。

6　（　）（かっこ、まるがっこ、パーレン）……主として注解的な部分であることを示すのに用いる。

「現代かなづかい」（俗に「新かなづかい」ともいう）では「ゐ」「ゑ」は用いない。

7　――（ダッシュ、dash、棒線）……挿入句を示したり、文の中絶などに用いる。

8　……（リーダー、leader、点線）……リード、省略、音声のとぎれなどに用いる。

「では、これで……」と言って立ち上がった。

9　？（疑問符）……疑問の気持や尻上がりのイントネーションを表わす。
　この犬はなかなかの人格者（？）であった。
　「一緒に行かない？」「映画？」
10　！（感嘆符）
　「やめろ！やめろ！」と叫んだ。
疑問符・感嘆符は、欧文では疑問文・感嘆文に必ずつける習慣であるが、国文では必要に応じて用いるだけで、あまり頻用すると、品位がなくなる。

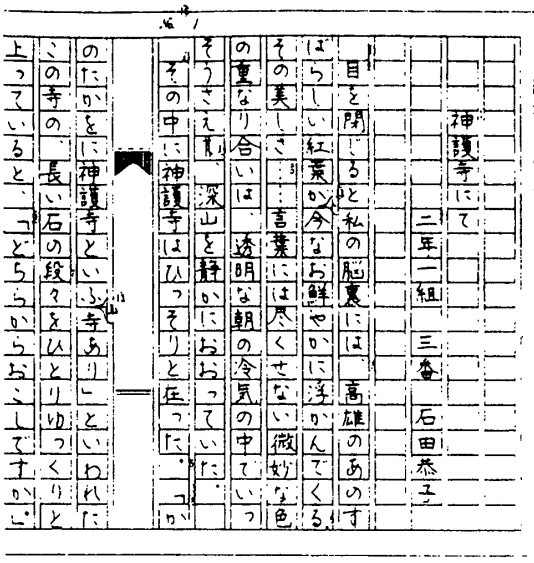
　なお、句点・読点・中点・括弧類や疑問符・感嘆符の類は、原稿用紙では正しくひとます（一字分）とるのがよい。ただし、句点・読点が行頭に来る時には、前行の下に追込んでおく方がよいと言われる。棒線・点線の類は、特別の場合を除き、原稿用紙ではふたます分をあてるのがよい。

※読点については、岡崎洋三『日本語とテンの打ち方』（晩聲社）を参照してほしい。

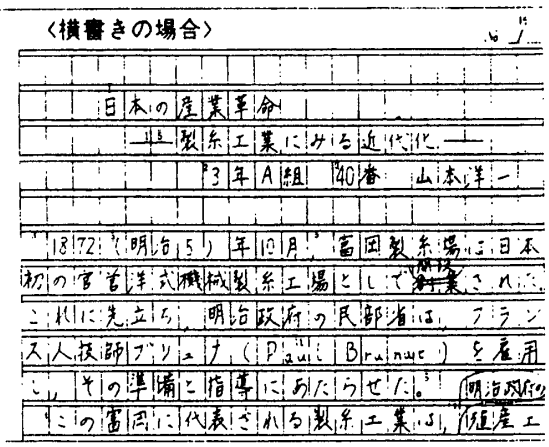
出典『文章表現必携』（学燈社）の林巨樹「文章表現便覧」より抜粋

5　原稿用紙の書き方

〈縦書きの場合〉



〈横書きの場合〉



①題名（表題）は、ふつう第一枚目の二行目、三、四字目から書き出す。題名が二行にわたる場合、区切る場所を考え、一行目の下を二、三字以上あけて二行目に移り、行のはじめをそろえたほうが見やすい。副題をつける場合は、改行して前後にダッシュ（――）を置き、題名よりは、少し下げて書く。

②氏名は、題名の次の行の下方に書く。学校に提出する場合は、学年、組、出席番号を書くようにする。

③本文は、氏名からふつう一行あけて書き出す。

④書き出しや改行するときは、必ず一字分あける。

⑤漢字、平仮名、片仮名、句読点、符号は、一字分をとって明確に示す。ただし、ダッシュとリーダー（……）は二字分とる。

⑥句読点など、文や句の終わりに使う符号は、行のはじめにくることを避け、前行の末尾に置く。

⑦漢字一字の繰り返しには「々」を用いることができるが、行のはじめにくるときは、本来の漢字を使う。また仮名の繰り返しには、「ゝ」や「〳〵」などの繰り返し符号は使わない。

⑧引用文を示すには、「　」に入れることが多いが、改行して行のはじめを下げることもある。特に長文を引用する場合は、改行して、引用文全体を二字ほど下げて書くとよい。

⑨会話は、原則として「　」に入れて示す。

⑩数字は、横書きで、数量や、順序などを示す場合のみ、算用数字を用い、一ますに二字入れる。なお、固有名詞などに使われている場合は、横書きでも漢数字を使う。

⑪横書きでローマ字を書く場合は、ふつう大文字は一ますに一字、小文字は二字入れる。

⑫やむを得ず訂正する場合は、不要な部分を‖や斜線などで消し、すぐそばに、わくで囲むなどして書き直す。

⑬語句や文を後から書き加える場合は、入れる語句・文を、わくで囲むなどして、入れる箇所を明確に示す。

⑭削除する場合は、誤解のないように完全に消す。

⑮縦書きには縦書き用、横書きには横書き用の原稿用紙を用いる。

⑯原稿用紙が二枚以上になる場合は、通し番号を付けてとじる。

『国語表現』（大修館書店）より

第二章　日　記

1　日記の意義

日記は、日ごとの実際にあったことや、感じたこと、考えたことなどの記録である。内容も形式も自由であり、自分の気持ちや意見を自分なりのことばで気軽に表現すればよい。その意味で、日記は最も素朴な文章表現であるといえよう。

日記を書くことは自分の生き方について反省させ、自分の心を慰め、さらに、よりよい人生への手がかりを得させてくれることにもなる。

次の文章は、自分にとって日記とは何であるか、について書かれた一高校生の感想である。

日記と私

新谷　立佳子

夜中、ラジオをききながら机に向かう。そして机の奥の方から日記帳をとりだすと、私の一番心の安らぐ時間が始まる。日記を目の前にして、私の頭の中には一日の出来事がそのまま映し出される。そして私は一日のうちの一部を日記に書きとめるのだ。

私が日記を書き始めたのはいつ頃だったろう。たしか小学校三年生くらいの時、父に書きなさいと言われたのが一番始め。その時の日記はもうどこかへ行ってしまったが、いつも一言しか書いていなかったことを覚えている。「今日はたのしかった。」、「きょうはつまらなかった」など。

私が自分の意志で日記をつけ始めたのは中学三年生の時だ。中三のとき、いろいろなことがいっぺんに起こり、頭の中がごちゃごちゃになると、日記に書き留めながら心の中を整理した。

そして今、私にとって日記とは何だろう。そのことを考えると、いつも、「アンネの日記」が心に浮かぶ。アンネにとってそうであったように、私にとっても私の日記は心の支えであり、一番の友だちだ。ありのままの私の気持ちを書き留めることのできる相手であり、私が何を書こうと、いつもそのまま受けとめてくれる。

日記を読み返すと、まるで、「私の歴史」を読んでいるような気がする。今はまだすごく浅い歴史だが、いつまでも日記を書きつづけ、私の人生を書き留めていきたい。

（一九八〇年度　名大附属高二年）

2　日記をつける心構え

(1) 日記を書くにあたって、その一日の生活をていねいに思い返してみる。
(2) 一日のできごとを整理して、事実を客観的に、正確に記録する。
(3) 事実の記録とともに、自分自身のありのままの感想や意見を気楽に書きつけておく。
(4) 喜怒哀楽の心の動きを思いきり表現してもよい。
(5) なるべく簡潔な文章で、的確に要点をとらえて表現する。
個人的な生活記録なので内容・形式はすべて書き手の自由であり、自分にとって最も効果的な書き方を工夫するとよい。

3　日記の文例

一九八四年四月九日（始業式当日）のこと

西村　美由希

今日は始業式だった。クラスはA組になった。久々に皆と顔を合わせて、「キャー、いっしょのクラス？ヤッター！」と喜んだ。同じクラスには、りっちゃん、カッコ、ナミちゃん、トモなどがいて、けっこう楽しいクラスみたい。残念ながら、せわしいユミちゃんとは違うクラスだったけど、選択の授業で一緒だからいいや。

始業式の前に離任式と新任式があったから、それだけで、もう疲れちゃって。その後、引き続き始業式だもん、たまったもんじゃなかった。ホームルームはみんなにぎやかで、先生のことばがよく聞こえなかったほどだ。本当にうちのクラスの男子ってにぎやかだなあ。LTの後、みんなで春休みのお土産交換をやった。明日からは〝授業〟、がんばるぞ。

（一九八四年度　名大附属高三年）

4　学習事項

(1) 各自の経験にもとづき、日記の意義や方法について話し合おう。
(2) ある特定の一日を選んで、自分の行動や思索などを日記の形で自由に、できるだけていねいに記録してみよう。
(3) 各自の記録をもとにして、「わたしの一日」という題で、八〇〇字程度の作文を書いてみよう。

第三章　要約と感想

1　要約について

要約とは文章を正しく理解した上で、その記述内容を簡潔にまとめることである。

それは、いわば国語表現文の情報を、的確に整理する国語表現技法であり、短い時間の中で、いかにその内容を集約するかが、学習の課題となる。

(1)　要約の要所

国語表現の学習過程における要約の要所は、まず、形式段落ごとに、その中心的な語句や内容を抜き出す。

次に、抜き出す語句や内容の字数が、どの形式段落についても、ほぼ同じ字数となるよう注意する。

そのさい、抜き出す語句や内容は、それぞれの形式段落の見出しのようなものでよい。

(2)　要約＝要旨・主張ではない

要約する時、問題文全体の結論に重点を置いて、まとめる生徒がいるが、それはまちがいである。要約は、問題文全体の様子が、ザッとわかるようにまとめなければならない。

2　要約の仕方

(1)　問題文を、ゆっくり通読する。

(2)　段落の順序に従って、1、2、3、……と段落番号を付ける。

(3)　各段落ごとに、中心的な事柄を表している部分と、その説明に相当する中心的な語句を抜き出す。

（各段落の見出しを書く、という心構えで取りかかる。）

※　このワークブックには、要約のための下書き用紙が準備してある。それを使って、中心的な語句を抜き出すと、作業が能率的に行える。

また、下書き用紙を使用すると、次の(4)以下の作業が手順よく進行できる。

(4)　抜き出した語句の順番を、入れ替えた方が、全体としてまとまると思われる場合は、下書き用紙の番号のところで、番号を付け替えておく。

※　各段落ごとの中心的な内容に、傍線を引いておいて、それを利用して要約する仕方がある。

この仕方は、傍線の引き方に過不足があったりすることと、すべての段落に引き終ったとき、傍線部分の全体の様子が明確でない欠点とがある。

要約の練習用には、使用しない。

(5)　「要約の仕方」(1)から(4)までを行って下書き用紙に、各段落の間のつなぎのことばや、簡単な説明のことば等を書き加えて、文章全体がなめらかになるようにする。

(6)　下書き用紙の中で、重複している語句を削ったり、時には、補うことばを書き加えて、字数を整える。

※　各段落から抜き出す語句を、20字～30字ぐらいに定めておくと処理しやすい。

(7)　原稿用紙に清書する。

3　感想について

問題文を読んで、感想を述べることがある。

要約が、問題文の忠実で、客観的な理解を目指し、感想は、問題文を読む側の自由で、個性的な発想が基本となっている。

感想としては、

(1)　問題文を要約した上での感想が理想である。

(2)　問題文の一部の段落を取り上げた感想も説得力のある場合が多い。

(3)　問題文の筆者や書かれた時期などについての感想にも味がある。

(4)　感想を発表する読者の側の問題を取り上げるのも面白い。

感想を、感想文の形でまとめるには、人の心に訴えかけるところのある表現を取り入れる工夫が必要である。

問1　次の文章を要約メモにまとめ、200字以内で原稿用紙に要約しなさい。

テレビとどう付きあうか

情報伝達の手段がこれほど量的に広がり、さらに高度化、多様化へと進んでいる時代はかつてなかった。私たちは、情報化社会のなかに生きていると言われる。

コミュニケーションの発達が、人間の社会生活に大きな利便をもたらしていることは間違いない。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などのマスメディアからは毎日、膨大な量の情報や知識が送り出される。テレビをつけ、新聞を開くだけで、世界中のあらゆる出来事を知ることができる。

一方で、しかし、現代の人間はあふれるほどの情報の洪水のなかで、戸惑いを覚え、不安にもなる。コミュニケーションがこれほど発達しているというのに、親と子どもの話し合いがない。先生と生徒の気持ちが通いあわない、といった事が起きている。情報社会の進展は、社会生活に大きな影響を及ぼし、さまざまな問題を生み出している。

ことしの「青少年白書」は、特集テーマに「情報化社会と青少年」を選び、テレビ、新聞などのマスコミュニケーションと青少年とのかかわりを分析した。マスコミの影響は、心身ともに成長の過程にある青少年にとって格別に大きいという考え方からだろう。

白書を読んで、いちばん気がかりに思うのは、小、中学生世代の子どもとテレビとの関係だ。最近、国民の間にテレビ離れの傾向が見られると白書は指摘している。それでも、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌の四つのマスメディアのなかで、テレビにさかれる時間は依然として最も長い。「ながら視聴」を加えると、国民は平均して一週間のうち、まる一日をテレビを見て過ごしている。

しかも、テレビ離れの傾向は二十歳代の若者にたしかにうかがえるのに対して、十歳から十五歳の子どもたちの場合は、テレビを見る時間（平日）は逆に増えている。平均で二時間半を超え、長いのは三時間、四時間にもなる。習慣でなんとなく、他にすることがないから、とテレビの前にすわる。「テレビづけ」「テレビ中毒」の状態だ。

「むずかしいことを考えるのは苦手」「なんとなく意欲がない」などと、自分の性格を否定的にみている子どもの割合は、テレビを見る時間が長くなるほど増えている。「目や姿勢に悪い」と思っている子どもも多い。子どもたちも不安を感じているのだ。テレビの見すぎが成長期の子どもに及ぼす悪影響については、医学や心理学の立場、教育の場からの指摘がある。その懸念は、テレビっ子世代に現実にあらわれている。

学校や塾から戻ると、家にこもって、テレビを見る。外へ出て遊ぶ友だちも、場所もないというのは、子どもにとって健康な生活とは言えない。テレビが送りつけてくる映像と言葉をただ受け入れるのに慣れてしまう。自分で体験し、考え、理解して、判断する力が育たない。

ブラウン管から流れるどぎつい性や暴力の場面にも、さして驚かなくなっているのが、現代の子どもたちだ。そうした傾向と非行との関連もさらに深く分析する必要がある。

もちろん、テレビには、すぐれた機能がある。良い番組もある。問題は、成長しつつある子どもたちに、テレビをどう見せたらよいかということだろう。テレビを見るのは夜何時までという決め方をしている家庭はかなり多いが、番組の選択を親が一緒に考えている例はまだ少ない。

テレビが子どもに与える影響は、もっと本格的に研究すべき問題だ。そして、テレビとの付きあい方をどう考えたらよいか、親も社会全体も答えを迫られている。

「朝日新聞」一九八三年十二月八日社説

要約メモ

題名（　　）

段落番号	抜き出し欄（各段落　20字～30字程度）

問2　次の文章を要約メモにまとめ、また感想を下書きし、400字以内で要約と感想を原稿用紙に書きなさい。（要約、感想それぞれ200字程度）

日本語との出会い

十年ほど前の春、私は日本語と衝撃的な出会いをした。生まれた時から日本に住み、日本語を話して生活してきていたのだから、二十歳もとうに過ぎてから「衝撃的な出会いをした」というのも妙な話なのだが、実際その体験は私にとって、人生観に変化をもたらすほどの出来事だったのだから、あながち誇張ではないのである。

その頃私は、NHKで新しく始まる番組の司会役の一人を仰せつかり、ブラウン管を通しての大任にいささか緊張していた。番組のタイトルは「日本語再発見」。その中で私は本編の司会役とは別に、番組の最後の五分間を与えられて、日本各地の方言を訪ねる、という仕事をいただいたのである。

初めに訪れたのは鹿児島市の朝市である。初仕事に張り切る私はマイクを片手に勢い込んで朝市のにぎわいの中に飛び込んだ。「おはようございますー！」朝市の売り手のおじさん、おばさん、そしてお客たちもニコニコしながらいっせいに話しかける。「こうてきやんなあ！」「おやっとさでごわんなあ」「でーこ、でーこ、二百円」

途端に私は青ざめた。彼らが何を話しているのか、さっぱりわからないのだ。いや一つだけわかった、モノの値段である。カメラは録画を始めているのでとにかく何か尋ねなくては、と言葉を掛けるのだが、返ってきた答えがわからない。ようやく地元の方言研究家の方の通訳を得て、前述の言葉はそれぞれ「買っていって下さいな」「お疲れさまですね」「大根、大根、二百円」であることが理解出来たのだった。

大変なショックであった。私も日本人、朝市の皆さんも日本人、なのに言葉がわからない。これはどうしたことだろう。中学・高校で英語を習い覚えた私にとっては英語の方が鹿児島弁よりもはるかにわかりやすい、という現実に直面して、私の中の日本語観はぐらりと大きく揺れたのだった。そしてしばらく考えている内に、思い当たったことがあった。

私は東京生まれの東京育ち。父は江戸っ子で、母は大分出身だが、学生の時に上京して以来、すでに三十年以上もこちらに住んでいる。そんな私の言語環境は初めから東京弁風のアクセントのまじる共通語である。そして、テレビやラジオを通して接する日本語も普段私が話しているのとほとんど変わらないことから、私は、私の用いている言葉が日本語として普通なのだ、と思い込んでいたのである。もちろん各地方には方言があるのだ、ということは知っていた。でも母の郷里や旅先などで出会う言葉は、私のとは少しは違っていたけれども、わからないというほどではなかった。それが実は、私の出会った人々が、私にわかるように、共通語風の言い回しをして下さっていたのだ、とは、鹿児島の朝市に出掛けるまで気づかなかった自分が恥ずかしくなった。まさに東京育ちの傲慢さが言葉の問題を通じて露呈したのである。

それからの一年間、私にとっては毎日が日本語との新たな出会いであった。訪れる町々、村々で私の知らない言葉に出会うたびに、その言葉の裏にある私の知らない暮らしや風土を思い、それこそ千差万別な言葉と生活文化がこの国には生きているのだ、と感動した。「日本」というとすぐに「島国」だの、「単一民族」だの、閉じられた均質なイメージを抱きがちだが、それは違う。この国には実にさまざまな人が暮らし、それは単に地域の違いだけではなくて、年齢差や性別などでも異なっている。極端に言えば、一億二千万人の一人一人が異なる心と身体を持ち、この国の文化を背負っている、そのことを私は日本語との「衝撃的な出会い」によって知らされたのであった。

「月刊　日本語」創刊号の如月小春（きさらぎこはる）の文章による

要約メモ

題名〔　　〕

段落番号	抜き出し欄〔各段落　20字～30字程度〕

感想下書き

第四章　手　紙

1　手紙に対する意識

現代は電話が普及して、手紙の書かれる機会が減少したことは事実である。しかし、現在も将来も手紙のもつ意義や必要性が失われることはない。手紙をもらって感動した経験をもつ人は多いと思う。名大附属中学・高校でのアンケートによると、手紙の「好き」、「嫌い」の主な理由として、次のようなことがあげられている。

〈好きな理由〉「遠くの友との情報交換や心の交流ができる」、「電話とちがって、ゆっくり考え、ことばを選んで書ける」、「相手の返事がたのしみ」、「素直に心を伝えられる」、「普通の文章よりも親しみやすく書ける」等。

〈嫌いな理由〉「めんどくさい」、「時間がかかる」、「字がへただから」、「書き出すまでがおっくうだ」、「文章がうまく書けない」、「手紙の形式がやっかいだ」、「用事があれば電話でことが足りる」等。

手紙の嫌いな人は手紙が好きになるように、手紙の好きな人もますます手紙に親しむように、ぜひ実際に手紙を書くことを心がけてほしい。

次の文章は、手紙のよろこびについて述べた一高校生の体験記である。

私と友達――手紙を通して――

水野　奈美

私がたくさんの手紙を出すようになってから、はや五年になる。私は小さい頃から手紙が大好きで、近所にしか友達がいないのを残念に思っていた。用事があるなら一走りもすれば足りるのであり、誰か手紙を書く相手はいないのかと、母をいつも困らせていた。ところが中一の三学期を終る頃、不意に転校という一大事があったのである。

手紙とは何とすばらしいものだろう。遠く離れた友達と心が通じ合えるとは。友達が悩んでいれば、その苦しみを半分にしようと、こちらも心をこめて書く。修学旅行があった時、お互い興奮しながら便せん五枚にわたる報告を書き、小さなお土産とともに地方の香りを届け合う。私は新しい中学校で二年間、転校生として過ごしたわけだが、そのために悔しく辛い思いをしたことが幾度もあった。そんな時、机に向かい、友達の心にペンを走らせる。友達はいつも私を理解してくれ、心のこもったアドバイスをしてくれた。

私は今まで五年間の手紙をずっとダンボール箱にとってある。箱を開けると過去の思い出が蘇り、手紙の一つ一つに何か感謝の気持ちさえ生まれてくるのだ。今でも七人の常連、そして、ときどき手紙をくれる人を含め、年間九〇通、ピークの年は一三〇通を越える文通を続けている。

たしか、三年前の夏休みだったと思う。昔、ピアノを習っていた先生から暑中お見舞いの返事が届いた。その一節にこんなことが書かれてあった。「人間は生きている限り苦しいことがたくさんあります。熱中できる何か、自分を支える何かを持ちなさい。」と。

温かい心のこもった友達の手紙、それが自分を支える大きな力だと、私は胸を張って言うことができる。

（一九八四年度　名大附属高三年）

2　手紙の書きかた

(1)　手紙の形式

手紙には一定のしきたりがあって、基礎的な知識はひと通りわきまえておく必要がある。手紙文は一般に次のような形式で書かれる。

- 前文
  - ①起首（頭語）
  - ②時候のあいさつ
  - ③安否のあいさつ
  - ④お礼、おわび
- 主文
  - ⑤起辞
  - ⑥用件
- 末文
  - ⑦結びのあいさつ
  - ⑧結辞（結語）
  - ⑨日付
- 後付け
  - ⑩署名（自分の姓名）
  - ⑪あて名・敬称
- 副文
  - ⑫追伸文

前文
① 拝啓
② 街を行く人々のファッションにも夏物が目立つようになりました。いよいよ本格的な夏の訪れですね。
③ 良子さん、いかがお過ごしですか。
④ 私の方は風邪ひとつひかず、元気に毎日を送っています。
⑤ いつも、御地のおいしいお菓子を送っていただき、ありがとうございます。

主文
⑥ ところで、あなたと私が毎年ボランティアとして参加している、こどもキャンプの開催日時と場所が、ようやく決まりましたのでお知らせします。
今年は、八月九日から十一日までで、場所は福島県にある国立那須甲子少年自然の家だそうです。丁度、クラブが休みの時期ですので、私は今年も参加することにしました。
良子さんはどうしますか。参加出来るようでしたら至急連絡して下さい。あなたの分も登録しておきます。

末文
⑦ それではまた、東京でお会い出来る日を心待ちにしております。
⑧ 敬具

後付け
⑨ 昭和六十三年六月二十日
⑩ 山田良子

副文
⑪ 小林良子様
⑫ 追伸　確か木村さんも今年は参加したいと言っていましたので、お伝え下さい。

（前文）

1、起首は書き出し言葉で、「拝啓」「拝復」などを使い、他家を訪問した際の「ごめん下さい」にあたる。
2、続いての〝時候のあいさつ〟は起首の下に一文字分あけて書き出すか、改行して書き始める。
3、用件だけを伝えたいときや、親しい友人へ出す手紙などは、起首を「前略」「冠省」としてあいさつを省き、いきなり本文に入る。
4、普通、お悔やみ、お見舞いなどの手紙では前文を省略し、自分の方の消息も書かない。
5、安否のあいさつは、最初に相手の安否をたずね、次に自己の様子を伝える。
6、前文の最後に、「おわび」や「お礼」を述べる。

（主文）

1、主文の書き起こしを起辞といい、「さて」「ところで」「じつは」などが良く使われる。
2、普通、改行して一字下げて書き出す。
3、慰問や災害見舞いなどの手紙では起辞を省略する。
4、本文は手紙を出す目的そのもの。伝えたい用件を明確に書く。

（末文）

1、末文は手紙のしめくくり部分で、他家を訪問した際の別れの言葉、「おじゃましました」にあたる。
2、主文のあとに、改行して書き出す。
3、前文と同様、見舞状、弔慰状では省略する。
4、結辞は留めの言葉で、起首と対応する語を用いる。拝啓…敬具、前略…草々など。

（後付け）

1、日付は結辞の次の行に、（本文より二、三字下げ、）やや小さめに書く。
2、月日だけでもよいが、正式には年号も入れ、本文の頭とそろえる。
3、横書きの場合はアラビア数字で良いが、縦書きのときは、漢数字を使用する。
4、署名は日付の次の行の下に、書き終わりを本文の下にそろえるか、一字分くらい上でとめる。
5、目上の人に対しては自分と相手の姓と名を必ず楷書で書く。
6、あて名は、署名から一、二行離し、日付けより上で、本文にそろえるかやや下のところから、署名より大きめの字で書く。
7、あて名書きには略字や略称を用いない。
8、あて名と同じ大きさの字で、あて名の下に必ず敬称をつける。
9、敬称は相手方によってふさわしいものを使用する。
一般…様、殿（主に目下）
公用…殿（様もよい）
友人…君、兄、大兄
先輩…大兄、学兄、賢兄
恩師・医師・弁護士・画家・詩人…先生
官庁・学校・会社・団体…御中
多人数…各位、御一同様

（封筒の表書き）

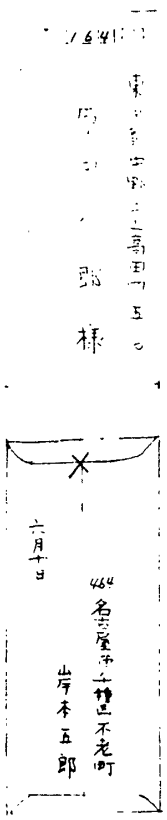
1、あて名は封筒の中央に書き、住所は長さに応じて区切りのよい所で分けて、二行に書いてもよい。

2、○○方の場合、○○様方と敬称をつけるのが礼儀。
3、切手は縦書きのものは左上、横書きは右上にはる。切手があて名にかからないよう、あて名を書くときは余白に気をつける。
4、字をあまりくずすと間違いのもととなる。また、相手に失礼となるので楷書で書く。
5、住所は郵便番号、都道府県名・市区名・町名・丁目・番号、マンション・アパート名・棟号・室号まで詳しく書く。
6、手紙の内容を示すわき付けを記す。本人以外には読まれたくない手紙には「親展」、開封を急いでほしいものには「至急」、返信である場合には「拝答」「御返事」、返信を求める手紙には「求返信」など。わき付けは敬称の左下に書く。
7、開封・取り扱いに注意してほしい手紙の場合、「写真在中」「履歴書在中」などの内容表示を記す。
8、角封筒で横書きとする場合、住所は左上から書き、番地は当然、算用数字で書く。姓名と敬称は住所より大きく、中央に書く。

(封筒の裏書き)

1、差出人の住所、氏名は、ほぼ真ん中の高さから、封筒の縦ぎ目をはさんで両側に分けて書く。
2、表書きでは同居先を「○○様方」と敬称をつけるが、裏書きではつけない。
3、日付は左上の住所より高い位置に小さく書くのが普通だが、右上でもよい。
4、郵便番号枠が印刷していない封筒では、住所の上に郵便番号を書く。
5、封じ目には普通、「〆」「封」「緘」などと書くが、美しいシールをはってもよい。
6、角封筒で縦書きの場合は、住所、氏名は封じ目より左に寄せて書く。日付は上の方、左右どちらに書いてもよい。
7、角封筒で横書きの場合は、住所、氏名を封じ目より下に書き、日付は上に書く。
8、角封筒のふたは右から封じるようにする。左封じは凶事のときとされている。

(以上「手紙の形式と解説」は、「手紙の書き方常識集」(小久保茂昭)から引用させていただいた。)



(2) はがきの書き方

はがきは、いわばふだん着でする訪問である。したがって、簡単な用件で、他人に読まれても差し支えない内容の通信であればはがきを用いてよいが、大切なことで、秘密にする必要のある用件の通信には用いてはいけない。また、改まった内容の通信にも、むろん用いるべきではない。

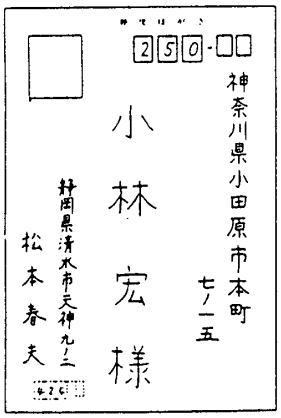
はがきの書き方は手紙の書き方に準じればよい。しかし、紙面が限られているので、専ら簡潔を旨とし、七、八行から十行ぐらいまでに書き終えるようにする。

最近は、はがきでは一般に頭語を用いず、更に、結語なども省略することが多い。

なお、改まった通信でも、挨拶状や案内状などは、はがきで済ますのが最近の傾向である。

(はがきの使用例)

その後お元気ですか。そろそろ新しい学校にも慣れてきたことと思います。
ところで、恒例の山行きのことですが、今年は七月下旬に、一泊二日の予定で鳥海に登ろうということになりました。詳しい日程は決まりしだい送ります。一同君の顔を見るのを楽しみにしているので、ぜひよい返事をお聞かせください。
それでは、その時お会いできるのを楽しみにしています。



(右の「はがきの書き方」は、「国語表現」(尚学図書)から引用させていただいた。)

(3) 手紙を書く心得

①書こうと思う手紙の目的(招待、見舞い、祝い、通知、依頼など)をよく考え、用件を簡潔に、わかりやすく書く。
②相手に対して敬意や親しみをこめて書く。相手が目上の人か、対等の人か、肉親か、男性か女性か、またどの程度の交際のある人かなども考えてことばづかいに注意する。ただし、オーバーな敬語は慎む。
③書き終えてから読み返し、誤字・脱字、失礼な字句、不明瞭なことばなどは訂正する。
④手紙の形式を守ることは望ましいが、余り形式にとらわれないようにして、のびのびと自分の真情が相手に伝わるように書く。
⑤手紙を出す時機を失しないように気をつける。返事はなるべく早く出す。

1

拝啓

毎日蒸し暑い日が続いておりますが、先生にはお変わりございませんか。私も、暑さに負けず元気に過ごしております。

さて夏休みも十日ほどたったわけですが、私にとってこの夏休みは、一日〳〵がとても長く感じられ、もうその倍くらい過ぎてしまったような気がいたします。前々から、高三の夏休みは大変だろうと、思っていましたが、やはり去年までとは違う、緊張した気持ちで休みを迎えました。休みに入ってすぐから予備校の夏期講習会が始まり、普段、学校があった時よりも早く起きなければならないのがとても辛いのですが、おかげで寝坊は絶対にしません。それに、大勢の人が真剣にやっている姿はとても刺激になって、私もがんばらなきゃという気持ちになれるので夏期講習を受けることにしてよかったなあと、思います。

今はこうやって勉強に勤んでいる私ですが、三年前の中学生の私は、大学を目指して勉強するなどということは、考えてもいませんでした。なぜかと言えば、私はそれまで、早く就職して働きたいと思っていたからです。

2

勉強が好きではありませんでしたし、学校で習うこと（特に、理科や高度な数学など）は、将来そういった関係の専門の方へ進まなければ別に必要なことではない、それなら自分のやりたい仕事を見付けて、少しでも長く働いた方が良いのではないかと、考えていたのです。その考えは、高校に入っても変わらなかったのですけれど、最近は、かなり多くの人が大学へ行く時代ですし、母も、「せめて短大ぐらい出ておかないと、結婚なんかにも影響するよ」などと言うので、心からの希望ではなかったのですが、就職の前提として、短大へ行くつもりでいました。

ところが今、私は四大を希望しています。少しも行く気などなく、（四年も行く人の気が知れない）とさえ思っていた四大を、目指しているのです。これほど私の気持ちに変化を与えたものは、一つは二年生の夏休みの三者面談の時に、担任の先生から言われた言葉です。「短大では勉強に追われる。大学は、もちろん勉強が本分だが、視野が今よりずっと広がるし、時間に余裕があるから自分の好きなこともできる。勉強したことが、将来に直接役立たないとしても、もしか、結婚して子供が生まれて、台所で

3

御飯を作りながら、芭蕉の歌がふっと頭に浮かんで来るなんていうのは最高じゃあないか。」私はこれを聞いてその時は、然程感激もいたしませんでした。しかし、母が「私も大学へ行けるのだったら、絶対行きたかった。大学を出たんは、話をしていてもやはりどこか違うからね。」と、前からたまに口にしていた言葉を思い出してよく考えてみますと、それまでの自分は、なんて視野が狭かったのかということを実感したのです。仕事と生活に必要な知識だけあれば良いなんて、今考えればとんでもない考えですね。私にはまだ常識的にもたくさん知らないことがありますし、教養がないと将来はずかしい思いをしなければいけないかも知れません。先生は、高校にもなってそんなことも分かっていなかったのかと、お思いになるかもしれませんが、私はその時、急に目覚めたような気持ちになって、同時に、それまでの私をとてもはずかしく感じました。就職のことを考えると、やはり短大にしようかしら、と迷いましたが、就職の心配は四年後に後回しして、短大では得られないかもしれない、何かを発見しに、四大に進もうと思っております。

4

気持ちがガラリと変わった時以来、学校での先生方の講義もいく分興味を持って聴くことができるようになりましたが、受験勉強は、やはり辛いものです。やればやるほど解らないことがたくさん出て来て、いやになったりもします。でも、そんな時は、まだ体験したことのない大学生活を心に描いてがんばります。

先生も、くれぐれもお身体を壊さぬよう、お気を付けください。

長く、読み辛い文章であったと思いますが、最後まで目を通していただいて、どうもありがとうございました。

かしこ

七月三十日

藤原由美

米山誠先生

（一九八四年度　名大附属高三年）

第五章　小論文

1　小論文とは

筋の通った主張のある文章で、自分の意見や考えを述べるのが小論文である。読み手を論理的に説得するためにはわかりやすさと明快さが必要である。まず、自分の考えをまとめること。主題文を先に書いてみるとよい。次に、読み手に共感・理解される内容があること、様々な視点から考え、客観的で具体性のある資料で構成する。データベースの利用や、幅広い情報と知識の蓄積を心がけるとともに、いかに取捨選択をするかが大切である。制限と枠組の範囲内で、的確な具体例を示すことが小論文の個性をつくる。また、表現は、疑問・推量・否定形より断定を中心とした肯定表現がよい。

2　大学入試における小論文出題形式

1　……について述べよ。(私立) 60分

2　次の資料（図表・絵・写真）を見て……について400字で述べよ。(国公立)

3　次の文章を読み……について800字で述べよ。　90～120分

3　小論文を書くまで

「資料」の理解とまとめ　（調査と知識）

←

問題点の検討と思考　（視点の移動）

←

構成メモ　（的確な具体例）

←

下書き　（一貫した論理）

←

推敲　（句読点・接続詞・改行・文末表現……読む人の立場）

←

清書

4　大学入試における小論文のテーマ例

(1)　作文的なもの

- 友情について
- 私の長所・短所
- 高校生活について
- 青春について
- 差別について（男女・障害者・人種）
- 読書について
- 生きがいとは

(2)　人文・社会科学系

- 日本経済を考える
- 物質文明と人間の心
- 高齢化社会
- 我らの時代（将来の展望も含めて現代の課題）
- 情報化社会
- 国際交流について
- 週休二日の実施と余暇の利用について
- 消費税の導入について
- 基本的人権の成立過程とその意義

(3)　教員養成系

- いじめと校内暴力
- 教育の場における競争について
- テレビの功罪
- 教師として子供とどう関わるか
- 科学技術の進歩と人間の未来
- 障害者の問題について
- 高校中退者の問題について

(4)　理・医学系

- 生命の尊厳
- 病と死
- バイオテクノロジーの未来
- 資源の有効利用と環境破壊

枝りの時代

年　月　日　中三年B組四番　氏名　岡島　朗

「社会科解体」こんな言葉に驚かされてきた。高校の社会科がなくなり地歴科と公民科に分かれ、小学校科目が現代社会から世界史になる、ということらしい。父が高校社会科教師という三桂賀一さんはないような気がしてこの二ニュースを聞いたわけだが、ばかなことをやるものだ、と思った。

しかし実際の社会科の教師の人たちはそれほど反対の意志を強のてはいないようだ。①ではどうしてそんなことを決めたのか。答えは一つにしぼられる。②「思想の統一」である。戦後直後に制定された社会科には今日まで多くの問題がとりざたされたのだが、③民主化への道でもあったような気がする。しかし再び戦前へ向おうとする気運の中で、社会科は大きなまがり道にさしかかろうとしている。④「思想の統一」恐ろしいことである。皆が同じようなことしか考えられない。まさにすべての自由を奪うもののようにすら思われる。

学者の仕事というのでは差⑤なかったわけではないが、今回の事で自分は教師はいやだな、と思うようになった。結局三⑥教科、⑦弱者のようであり、二から決められたことをのみこむことしかできないのではないか、と思ってしまう。

次の時代は我々がつくる時代である。一歩一歩戦前へ—今回の社会科解体も含めーすもうとしている現代社会を、止めて修正するのも、このまま進むのを見ているのも、今のそして次の我々に課せられた大きな問題のように思った。⑧事時刻々移りかわる時代の中で今回の二ュースがどれほど大きな、そして重大なことかを⑨利解し、考えなければならない⑩と思った。

（一九八七年度　高三）

①③一断定の文にする②論拠が不明。④「は」「助詞」を入れる⑤繰り返し「して教師」⑥考え⑦点足らずで説明不足。形⑧時事⑨理解⑩段落

文章力のある。論旨は平易でわかりよい。しかし、論旨の資料や論拠を説明するための要素が必要である。独断的な結論では誰も説得できない

末の結文は「…ならない」（意志）が小論文らしい文体。

小論文　構成メモ

（　）組（　）番・氏名（　　）

題目	要旨（主題文）	点要の落段各						備考
		一	二	三	四	五	六	

小論文　構成メモ

（　）組（　）番・氏名（　　）

題目	要旨（主題文）	点要の落段各						備考
		一	二	三	四	五	六	

話すこと

第一章　話すことについて

私達は日常いろいろな言語活動をしているが、その中でも「おしゃべり」は大変楽しいものである。気の合った友達となら時間がたつのも忘れるほどである。しかし、まとまりのある話を、年齢や考え方の異なる人たちの前できちんと話そうとすると意外にむずかしいものだ。あがってしまい足がふるえて何を話したか覚えていないという経験はないだろうか。本校生徒のアンケートからもそんな悩みがうかがえる。

では、私達はきちんと話すためにどのようなことを考えたらよいのだろう。

話すことには「会話」「会議」「討論」「スピーチ」などがある。国語表現では、内容の多様性や時間の自由さ、あるいは一人で準備が出来ることから「スピーチ」を取り上げている。「スピーチ」には「書くこと」による表現に比べて、聞き手と共有できる生き生きした場がある。日頃ふざけてばかりいる友達の真面目な面を発見して驚いたり感心したりする。そして、聞き手の態度を反映し「スピーチ」が魅力あるものに変わってくる。聞き上手がいて話し上手がいるのである。

次に考えたいのは話す内容における「個性」である。もちろん、話す技術が大切なことは言うまでもないが、「自分でなければ話せないこと」とは何だろうか。「個性」とは話し手の人間性だ。たとえ、言い足りない言葉であっても、豊かな人間性があれば話し手が言いたいことは充分伝わるのである。

また、「話すこと」のもう一つの側面は、話した経験がものを言うことだ。人前で話すことが初めは苦手でも馴れると平気になる。生活をすることは話すこと（コミュニケーション）であるというのは大げさかもしれないが、現代の私達の生活のさまざまな場面で話すことによる自己表現を豊かにしていきたいものだ。

〈名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校生徒に対するアンケート（一九八四年）より〉

○アンケートの質問事項

(1)「あなたは次の言語活動のそれぞれについて、どの程度、興味・関心・意欲がありますか。〝感想や意見を人前で話すこと〟、〝文章を書くこと〟、〝人の話を聞くこと〟、〝文章を読むこと〟。」

(2)「日常の言語活動において困ること・悩むことがありますか」

○調査の結果

中学生（1～3年）	話す	書く	聞く	読む
非常に強い・かなり強い	13%	24%	43%	50%
あまりない・ほとんどない	56	39	14	22
どちらともいえない	31	37	43	28

高校生（1～3年）	話す	書く	聞く	読む
非常に強い・かなり強い	19%	37%	50%	56%
あまりない・ほとんどない	49	27	12	16
どちらともいえない	32	36	38	28

右の表によって、興味・関心の高い方から順序をつけると、1位「読むこと」、2位「聞くこと」、3位「書くこと」、4位「話すこと」となることが一目瞭然である。しかも、「話すこと」に対する、興味関心の低さは際立っているといってもよい。

次に、「日常の言語活動において困ること、悩むこと」として挙げられた答えの中では、中・高とも「話すこと」に関するものが圧倒的に多い。「人前に出ると緊張して、自分でしゃべっていることがわからなくなる。」（中1女）、「頭の中で考えていることがうまく口で表現できない」（中2男）、「思っていることとちがうことを言ってしまうことがある。」（中3男）、「その場に応じての言葉の使い方がわからない。」（高2女）、「考えていることを簡潔にまとめて発表できない。」（高3男）等が代表的な例である。その他、「人前で話すとき、赤面する」、「汗がでる」、「早口になる」、「大きな声が出ない」、「敬語の使い方がわからない」、「名古屋弁がはずかしい」、「流行語がくせになってしまった。」、「ことばがどもる」等の困難点がいろいろと具体的に記されている。

第二章　スピーチ

1　「何を」話すのか

(1)テーマをしぼる

①テーマは一つ。

②テーマを二十字でまとめて整理してみる。

③脱線はしない。

(2)話す材料

①いつも疑問、不満に思っていること。

②日頃の観察（通学、買い物、部活、家族など）。

③新聞を利用して（投書欄など）。

④自分なりの味付け（受け売りではない）。

(3)結論・まとめについて

①結論…このテーマに対して自分はこう考える、という自分の意見。

②結論が最も大事なものだから、しっかりと述べる。

2　「どのように」話すのか

(1)話の順序を考える

①「事実」「それを裏付ける資料」「意見・主張」「理由」などと分け、構成を考える。

②「結論」を話しのスタートとするのもおもしろい。

(2)話に見出しを付ける

①大見出し・小見出し

「今日お話しすることは三つあります…」「大切なポイントは次の二点です…」など。

(3)具体的に話す

①形容詞に注意…先生にほめられてうれしかった。→どういうことで、何故、どのようにほめられたかなどを具体的に書く。

(4)一文を短くする

①主語と述語の距離を短くし、「～けれど、」「～で、」などとつなげない。

(5)単調に陥らない

①前置きを陳腐なものにしない。

「先生から次のスピーチをやれと言われ～」「私は話すのが本当は嫌いで～」などは要らない。

②速度の緩急…「早口」、「ゆっくり」を話の内容によって使い分ける。

③間をうまく取る。

最初は「間」が取れずに早口になりがちである。自分では遅いと思うぐらいがちょうどよい。

④口調…棒読みにしない。

3　話をどのように聞くのか

(1)話の流れを予測しながら聞く。

(2)話者の意見と事実をわけて聞く。

(3)話者の意見には批判的精神を持って聞く。

(4)項目（結論、理由、問題点など）を整理しながら聞く。

(5)メモを取りながら聞く。

4　スピーチの評価の基準

(1)時間…決められた時間内で話せたか。

(2)声の大きさ…声の大きさは適切であったか。

(3)姿勢、態度

・落ちついて話せたか。

・しっかりと前を向いて話せたか。

・身振り、手振りは有効だったか。

5　スピーチ文例（君達で推敲してみよう）

「子　供」

原田直子

私は近所に住む子供が嫌いです。これは私がたまたまいやな子ばっかりに会ったからだと自分でも思うんだけど、先週、ますます嫌いになってしまったことがありました。私が家に帰る途中で、遊んでいた小学生の三、四年の子が突然私に向かっていきなり「なにっ、この人。」と言い出して、それから「わっ、ブス。」と言われてしまいました。顔にけちをつけられるのはもうどうしようもないこと

だと思うから、無視しちゃえと思って通過してったら、その子たちはすごくしつこくて、遠く離れてもまだ文句ばっかり言っていて、いきなりのことで私も困ってしまいました。よっぽど私に気にくわないことがあったのでしょうか。でも、私はその子を全く知らないし、目もあわせてないし、顔も見てないし、はっきり言って赤の他人だし、ただ通り過ぎたという人にたいしていくら何でもこれはひどいなぁと思いました。……（中略）

それからこんなこともありました。ある日、私は本山に行こうと思ってバスに乗ったら、すっごくかわいい男の子がお母さんと一緒に乗って来ました。すごくかわいいなぁと思ったのですが、それは見た目だけでした。バスの中はすごく美人な白人の外人さんが三人、英語でペラペラ話して立っていたのですが、その子は何を思ったのか、その三人の外人さんを指さして「ねえ、お母さん、あの人たち変な言葉しゃべってるよ。」とか言って「怪物だぁ。」とバスの中に聞こえる声で、本山につく十五分間ばかり、ずうっと同じことを言って騒ぎたてていました。私ももちろん、回りの人もすごくびっくりしちゃって思わずにらんじゃったんですが、親も親で初めは「失礼なこと言っちゃだめでしょ。」とか言って、子供の頭をポカポカたたいていたんだけど、じきにあきらめて他人のふりをしてしまいました。だから、子供はもう信じられないことをぽんぽん言いまくって、外人さんたちにこの言葉が通じているのか、私はひやひやして聞いていました。さいわい、英語しか話していなかったから少しは良かったと思って、ほっとしてバスから降りたら、今度はその外人さんたちは本山の道を日本語で話しながら歩いていたのです。バスの中より外に出た後のほうが私はあせりまくってしまい、もう信じられないくらいびっくりしてしまいました。

小さい子供が外国人を見てそう思うのはしょうがないと言えばしょうがないですが、それをその本人の前で指をさして口に出すという振るまいは、やっぱり許せないと思いました。こんなことを平気で言ってしまうようになったのは、それまでそういう分別を教えていない親の責任もあると思います。私が今まで会った外国の子供にはそういう振るまいは少なくともなかったし、逆に私のことを自分のおねえさんのように見てくれたほどでした。

こういう話をすると私は本当に子供が嫌いと思われそうですが、私は一時は保母さんになろうと思ったぐらい子供は好きなのです。たまに知っている小さい子といろんな話をしたりしますが、子供はみんな根は素直な子ばかりだから、そのまま成長できたら本当にいいなあと感じました。

（一九八八年度　名大附属高三年）

6　スピーチ題目例

・名大附属について考える
・警察と法律
・交通事故について
・マグドナルドのハンバーガー
・いじめ
・校則
・目の悲しみ
・ろうあ者と手話
・比較（日本とアメリカ）
・自分と弓道
・私の文化的思考（サザエさんから）
・囲碁について
・三七人の若者と平和
・みかけ
・青少年の非行化と誘惑について
・スポーツを通して得たもの
・健康とジョギング
・英語
・集中力
・我が家と地上げ
・日本の経済について
・われ在る故にわれ思う
・旅
・夢（という言葉について）
・栄養について
・現代に生きる若者の心理をさぐり、学校のあり方について考え、明日の日本を考える
・小さな国際親善
・子供と夢
・リーダーシップについて
・飢餓について
・犬と人間
・舞台に立つ喜び
・はずかしがりや
・継続は力なり…書道十一年
・料理
・引っ越し
・うちのおばあちゃん
・ダイエットについて
・動物保護について
・人前でのお話し
・子供
・環境破壊の恐怖
・国際理解について（イギリス）
・掃除から学んだこと
・私のすばらしい体験（留学）
・血液型について
・現代高齢化社会とその実態
・スポーツの始まり
・大切なもの（松葉づえの五週間）
・「物の存在」とは
・現代音楽とベートーベン
・お金の価値観について

7　スピーチのメモ（全文を書くのではなく、要点程度を箇条書きにしておく）

8　スピーチ評価用紙

話し手	題目	評価	話し方	内容
要旨		良い	3	3
		普通	2	2
批評		良くない	1	1

話し手	題目	評価	話し方	内容
要旨		良い	3	3
		普通	2	2
批評		良くない	1	1

話し手	題目	評価	話し方	内容
要旨		良い	3	3
		普通	2	2
批評		良くない	1	1

第三章　面　接

1　面接での質問事項

(1)　受験する学校や専攻分野に関すること

①本学志望の理由・動機（志望理由書としてまとめる）
②学部・学科・専攻を選んだ理由・抱負（自分の生き方と結びつける）
③大学側が求めるもの――入学後の研究テーマ（学びたい学問）
④入学後にやりたいクラブ・サークル活動
⑤どういう分野・職種をめざすか→大学（短大）専修学校→高校

(2)　受験生自身に関すること

①受験番号、出身校名、校長名、居住地、家族構成、学資（源）
②性格の長所・短所
③特技・資格・趣味
④通学方法と時間
⑤小遣いとアルバイトの是非

(3)　高校生活に関すること

①高校生活で心に残ったこと（高一林間、高二研究旅行、附属博、部活）
②委員会・部活・クラブ活動（活動内容と役割）
③欠席・遅刻の回数とその理由
④得意・不得意科目とその理由
⑤附属高校の校風および特色（一学年三クラスの小人数で家族的な高校）

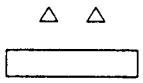
(4)　一般常識・時事問題その他に関すること

①最近話題になった内外の政治・経済・社会問題　（リクルート　消費税）
②時事用語・外来語・略語
③感銘を受けた本
④受験の感想、併願の有無
⑤小論文の内容
⑥国・社・数・理・英等の口頭試問（態度・姿勢・発表力・学力・応答のよさ）

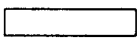
2　面接の形式

(1)　個人面接

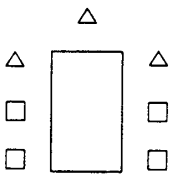
A　一対二



B　一対一



(2)　集団面接　（受験生同志の討論や話し合いを観察）



3　面接の評価　A・B・Cの三段階が多い

(1)　理解力――人のいうことを正しく理解し判断する。
(2)　表現力――自分の意見をきちんと相手に伝える。
(3)　人間性――志望する分野に合った適性と資質。
(4)　学習意欲――進路への目的意識。
(5)　高校生活の充実度――何かにうちこんで三年間をおくったか。

(6) 幅広い一般教養――高校卒業程度の知識・教養。
(7) 態度・動作――落ち着いた好感のもてるもの。相手の目を見て応答。
(8) 身だしなみ・言葉づかい――清潔感のある服装とはっきりした明るい話し方。

4　面接における言葉づかい

(1)「です」「ます」を使う（丁寧語）
(2)「れる」「られる」「お（ご）……になる」の形を使う（相手の動作に尊敬語）
(3)「お（ご）……する（いたす）」の形を使う（自分の動作に謙譲語）
(4) 人をさす言葉の使い分け
① 自分……「わたし」「わたくし」
② 身内の者……「父」「母」「姉」「叔父」。「さん」はつけない。
③ 相手……「あなた」「○○さん」「○○のかた」等。

5　敬語の使い方に注意

(1) 尊敬語と謙譲語を混同しないこと
例　先生がよろしくと申しておりました　（申す→言われて、おっしゃって）
(2) 一つの文の中での敬語表現は統一
例　鈴木さんは帰りました　（帰り→帰られ or お帰りになり）
(3) 敬語は使いすぎないようにする
例　おケーキもお食べになりますか　（おケーキ→ケーキ）
(4) 特別な動詞に用いられる敬語

ふつうの言葉	尊敬語（相手方）	謙譲語（自分方）
行く・来る	いらっしゃる・おいでになる	まいる・うかがう
言う	おっしゃる	申す・申し上げる
いる	いらっしゃる	おる
する	なさる	いたす
食べる	あがる・めしあがる	いただく
見る	ご覧になる	拝見する
与える	くださる	あがる・差しあげる
聞く	（特になし）	うかがう・うけたまわる